

4. 「学生による授業評価アンケート」全学的観点から見た現状と今後の課題

はじめに

2014（平成 26）年度の授業評価アンケートでは質問項目のうちQ1～Q16は昨年度から変更は行わなかった。Q10は授業以外での学習時間を問うているが、これ以外の項目では、回答の選択肢の数を昨年度の5項目から「5. そう思う」「4. どちらかと言えばそう思う」「3. どちらともいえない」「2. どちらかと言えばそう思わない」「1. そう思わない」「0. 該当しない」の6項目に変更した。今年度より新たに授業形態別（講義、演習、実習、卒業研究）の質問項目Q17～Q19を追加した。

全学的観点から見た回答の傾向

全学のアンケート結果集計表により、全体の回答傾向を検討した。

まず、「授業の状況（Q1～Q7）」の結果では、すべての質問項目で「5. そう思う」の回答が最も多くなり、最高で4.4、最低でも4.1であった。この結果から授業の状況はおおむね高い評価を学生から得ていると思われる。2013（平成 25）年度と比較するとQ1、Q2、Q7で前年度を上回っているものの、Q3、は同数値であり、Q4、Q5、Q6については若干の低下であった。

学生の「学習の状況」（Q8～Q10）についてはQ8「授業の内容は理解できた」で「4. どちらかと言えばそう思う」の回答が最も多くなっているが、「5. そう思う」との差は0.1%であり、さらに2013（平成 25）年度と比較すると2.6%低下している。ただし、「2. どちらかと言えばそう思わない」「1. そう思わない」という理解しづらかったという意見が微増しているので、一部の授業また一部の学生には授業内容の理解が伴っていないことも考えられる。

授業内容が理解できないということに関しては教員サイドで授業内容がより理解しやすくなるような創意工夫が求められるが、それ以外にも学生に対する個別支援などの検討も必要ではないかと考える。

Q10の授業以外での学習時間については2013（平成 25）年度と同様に1.0時間が最も多いうえに微増していた。5.2時間以上と4.1～2時間未満を合わせると23.2%となるが、1.0時間との回答は29.8%と高い数値である。昨年度も授業以外での学習時間については改善策の検討が必要とされたが、今回も同様な結果となったので精力的かつ抜本的な方策が必要である。

社会人基礎力を見るための「学習成果（Q11～Q16）」は2013（平成 25）年度がすべての項目で、「4. どちらかと言えばそう思う」となっていたが、今回はQ11、Q12、Q14、Q15、Q16が「4. どちらかと言えばそう思う」であり、Q13「この授業でコミュニケーションする力が向上した」とQ16「この授業で主体的に行動する力が向上した」は、「3. どちらともいえない」（ただしQ16は4と3が同数）が最も多かった。さらに全体平均では最高で3.9、最低で3.7と4を下回っていた。だが、昨年度の報告書でもふれているが、社会人基礎力は6つの能力すべてを1つの授業で養成できるということでは必ずしもない。よって各授業ごとに関連している能力を1つ以上設定しているのであって、この単純集計からのみ十分な社会人基礎力が培われていないとはいえないと考える。

自由記述から見られる課題

全学のアンケート結果の中からはおおむね良好な結果を得ていると思われるが、自由記述の結果からいくつかの問題点を抽出したい。

・改善すべき点について

「黒板の字を丁寧に書いてほしい」「黒板の字が読みにくい」「授業での声が小さい」「声が小さくて

聞き取りにくい」という基本的な部分についての指摘は少なからずあったが、声はマイクを使う工夫ができると思うが、黒板の字についてはパワーポイントの使用や印刷プリントなどの使用や併用が必要かもしれない。

「専門用語の説明がない」「質問に答えてもらえなかった」「内容が難しすぎる」「理解できにくい」という指摘に対しては、授業での教員の確認や説明などが必要とされると考える。

・良かった点について

「説明がわかりやすかった」「ためになる授業だった」「楽しかった」「よい学びになった」「先生の対応が丁寧だった」「授業に出席するのが楽しくなった」などがあげられていた。

各授業の授業評価アンケートの結果だけでなく、オープンクラスを今後も継続し、「参観・実施シート」を活用し、また、学部学科および研修会などを通じて、授業内容、授業改善を検討していく必要がある。

おわりに

2013（平成 25）年度から実施している授業担当教員によるフィードバックコメントの学内公開は今年度も実施した。これは授業評価アンケートの結果を受けての授業改善や自由記述での学生からの質問や意見に対する対処が必要であることから実施している。前期および後期の授業評価アンケートのフィードバックにより、前期よりは後期、後期よりは次年度の授業が改善され、学生の授業に対する理解が高まるように教員個々の取り組みはもちろんのこと FD 委員会による研修会等の実施も行いながら授業の質のさらなる向上につなげていかなければならない。

文責：三好 明夫（生活福祉文化学部生活福祉文化学科 FD 委員）